

環興の仏身観

——『無量寿経連義述文贊』を中心として——

姜 昌 鎬

『無量寿経』には法蔵菩薩が世自在王仏の前で本願を立て、永劫の菩薩道を修して阿弥陀仏になったと説いている。古来、浄土教家達の間には『無量寿経』に説かれている阿弥陀仏がどんなものであるかについて種々の議論が行われて来たのである。

本稿は、『無量寿経』の中で法蔵菩薩の願心によって顕示しようとした仏身とは何か、そしてその仏はどんな意味をもつ仏であるかについて『無量寿経義述文贊』に示された環興の見解を考察して見たい。

『無量寿経』の中で法蔵菩薩の願心は、世自在王仏を讃嘆する嘆仏偈から始まる。その嘆仏偈の釈を見るとそこでは

「初正求所歎即仏法身也」(大正蔵三七 一四八下)

と言ひ、法蔵菩薩が求めているのは仏の法身であることを示している。しかし、そこで言っている法身とは所謂自性としての法性法身の意味に限定した言葉ではないのである。この

ような仏身観の思想的背景としては多数考えられるが、環興の仏身観に大きく影響を与えたと見られる『撰大乘論』の中には法身と言う用語が自性身、受用身、變化身の三身の意味をすべて含んだ仏身の総称であると言われている。そして浄影寺慧遠も『大乘義章』の中で仏の三身を論ずる時、三身は皆法身と名付けるものであると述べている。このような法身の意味として理解すべき具体的な表現が『述文贊』にも見られる。

「所欲者功德法身快樂淨土」(大正蔵三七 一四九中)

と釈し、法蔵菩薩が真実に欲する仏身は功德法身であることと明確に示している。ここで功德法身と表現したのは環興の阿弥陀仏身観を理解するために注目しなければならぬものである。功德法身というのが自性身のみを示す言葉ではないことは明らかである。慧遠がただ「法身と淨土」と記したのに対して環興が「功德法身快樂淨土」という具体的な表現を

環興の仏身観（姜）

取ったのにはそれなりの意図があると言うべきである。またその次の嘆仏偈の釈文にも同じ意味の言葉が見られる。つまり、

「発無上覚心者即前願仏法身淨土之心也」（大正藏三七 一四九中）

と述べ、法蔵菩薩が世自在王仏に正請したのは仏の法身であることが再び強調されているのである。ここで言う「前願仏法身」とは前の釈文に出ている功德法身のことを示したものである。そしてその次の釈文に発願後の永劫の修行は身土の因を修することであり、正覚を成ずると言うのは身土の果を証したものであると釈したのには、阿弥陀仏を功德法身として名付けた理由が窺われるものである。

では、阿弥陀仏が功德法身であるならどのような功德相を持っているのかを見なければならぬ。環興は第十二願、第十三願、第十七願を撰仏身の願として見ている。その三願については願文に関する説明はほとんどなく、ただ願名が付けられているくらいに止まっているので、その願の成就文を中心に見ることにしたい。

第十二願は仏の光明無量を誓った願で、その成就文は十二光として阿弥陀仏の光徳を説いている。環興は慧遠の十二光釈をあげながらその釈は鄭重な釈ではないと言い、自釈を述べているので二人の釈を比較して見たい。

十二光 慧遠釈 環興釈

無量光 長 非算数

無辺光 広 無縁不照

無碍光 自在 無有人法而能障者

無对光 余不能敵 非諸菩薩之所及

焰王光 勝余光 光明自在更無為上

清淨光 離垢 從仏無貪善根而現亦除衆生貪濁之心

歡喜光 見心喜悅 從仏無瞋善根而生能除衆生瞋恚寂心

智慧光 於境善照 光從仏無癡善根心起復除衆生無明品心

不断光 照物無已 仏之常光恒為照益

難思光 過世間想 光非諸二乘等所測度

無称光 絕言想 亦非余乘等所堪説

超日月光 超世諸色 日夜恒照不同娑婆二曜之輝

以上のような環興の十二光釈を見ると、慧遠の釈に比べて仏の光徳を顯す上では意味深長な釈になっていると言ふことが出来るのである。ところで、環興はこの十二光釈の後に次のような説明をしている。

「総而言之。即身莊嚴故。論云相好光一尋色像超群生故」（大正藏三七 一五五下）

十二光は結局仏の身莊嚴であることを明かし、『往生論』の文を引いてその光は相好の光明であることを主張したのである。この点が相身を含んだ法身の意味としての功德法身の成就を示すものである。

次に、摂法身願と名付けた第十七願について考えて見ると、その第十七願は第十二願と深い関係のある願であることがわかる。第十七願に十方の諸仏から阿弥陀仏の名号が讃嘆されるというのは阿弥陀仏に功德が成就されたことを意味している。これを具体的に言うとうと光明名号の徳として名号が十方世界に達するのである。だから本願成就文では第十二願と第十七願とは一緒に光明の徳として説かれたのである。そしてこの第十七願文の内容に関連するものとして次の東方偈の釈文を見ておく必要がある。

「願作仏時徳名遠聞故云名願十方。即求仏身願也」(大正藏三七 一六〇中)

ここでも「名願十方」と言うところに仏身の意を認めているのが見られる。

さて、もし『述文贊』の中で言う法身が理体としての自性身のみに限定されるなら阿弥陀仏の独自性はあり得ない。自性身としての法身は諸仏共有の平等身だからである。環輿が功德法身という言葉を使いながら具体的な仏身の功德相を述べるのであれば、阿弥陀仏が諸仏とは異なる格別の意味も示さなければならぬ。阿弥陀仏が諸仏と異なる点を述べた文を見ると『述文贊』の冒頭には。

「欲辨本誓之不虚故。謂一切仏雖発本願本願亦有不能果遂。如般若中所有衆生令得滅度。法積願力即不如此故。今広説依正功德嚴

環輿の仏身觀(姜)

淨以願宿願必有所辨使増行者往生之意」と述べている。また四十八願を積する前にも、

「問諸仏本誓為同為異。異即違華嚴云一切諸仏悉具一切願滿方得成仏故。若同者亦違藥師十二本願弥陀四十八願故。答無有一仏少一願行而成道者故悉同也。然以對所化之機緣熟不同故。(中略)由此諸仏所有誓願雖有未必遂果而法藏菩薩所発之願皆有成辨故」(大正藏三七 一五〇下)

と言ひ、諸仏は一切願を具足して成仏するのに對して阿弥陀仏が四十八願で成仏したのは阿弥陀仏の本願が所化の機の為であるからと述べている。他の諸仏では救済することができない衆生まですべて救済しようとするのが四十八願であり、その四十八願が成就されて成仏したのが阿弥陀仏であることを明かにしたのである。つまり四十八願と言う別願によつて阿弥陀仏の格別の仏格が成就されたと述べているのである。

以上のように環輿は阿弥陀仏を格別の本願に相應した功德の仏身であると見ていたのである。その説明は応身に近いとも見えるが、それを応身と呼ばずに法身あるいは功德法身と言う語を用いることで阿弥陀仏の本願力に特別の意味を与えているのである。

〈キーワード〉 阿弥陀仏、功德法身、本願力

(龍谷大学大学院)